

父・関敬吾の思い出

関 信夫

はじめに

父、関敬吾は子煩悩であり、頑固である一方、大変頑張り屋であつたように思います。

また誰にでも学生・研究者を問わず顔を見ると「論文を書きなさい」と言うので、皆さんからはいやがられていたように感じます。

漁業から学問の道へ

関敬吾は長崎県南高来郡小浜町富津（現雲仙市）で父・修治・母・タダシの五男（十人目）として生まれました。関家は長崎県の小浜町で漁業を営んでいました。修治は小浜町の助役であり網元だったため、比較的裕福な家庭に育ちました。家族は五男五女の十二人の大家族でありました。

長男（一男・かずお）・次男（二翁・つぎお）は医者になりましたが、海軍医として軍艦勤務中に結核にかかり二人とも三代で亡くなりました。母親は残り三人の兄弟には、今後医者にだけは絶対にならないこと、又誰か家業を継ぐことを強く言われたようです。誰も家業を継ぎたくないで、三男（衛・まもる）は好きだった東洋美術史を専攻し長崎渇水短大教授になり、四男（寛之・かんし）は児童心理学を専攻し東洋大学教授になりました。

明治後半から大正にかけて長崎県の小さな漁村から五人の男兄弟に大学教育を行った関家の両親は、教育の必要性および重要性を予測していたのでしょうか。母親タダシは今で言う教育ママだったように思われます。

必然的に、残された五男（敬吾・けいご）が家業を継ぐために水産学校に行かされました。敬吾は当時の漁業設備や近海漁業の実状を考えたとき、将来大資本の漁業に太刀打ち出来ないと考え、自分の希望を親に強く訴えましたが、親は全く聞き入れてくれなかつたそうです。

関家は長男次男の病気療養等で多額の借金を抱えていました。従つて関家の経済状況から漁業を簡単には止められなかつたようでした。借金の返済や家族および網子五十人余りの生活など大きな問題を抱えて大変悩みましたが、敬吾は東京にいる兄（寛之）を頼り家出をし、東洋大学を受験しました。敬吾の決意に、親も漁業を続ける事を条件に大学進学を許してくれました。

敬吾の東京での生活は苦勞の連続だったようです。授業も生活も全て家業の漁業が最優先で、年に何回となく漁業の決算処理のため東京と長崎の間を往復しました。当時は関門トンネルもなく、特急で長崎まで二十八時間余りかかり、さらに長崎から小浜までの道のりを考えると、東京から小浜まで片道二昼夜ほどかかったようでした。

大学に籍は置いたものの授業にはほとんど出席できず、友達とのノートで勉強をしたそうです。ある時友達から父に「君が卒業出来るか賭けようか」とからかわれ、発奮した父は五番以内で卒業することを約束したようです。その結果について父に聞きましたら目標を達成し皆の鼻を明かしたように聞きました。

大学卒業後は東京大学図書館に司書として勤務しました。父は小さい時から作文と読書が好きでした。図書館時代に小さいころ母からよく聞かされた島原地方の昔話に興味を持ち、折口信夫の昔話研究会に通い勉強しました。また休みのときには昔話の採集に各地に出掛けてはいろいろな話を採集したようです。採集の難しさもさることながら昔話を語り部が創作や脚色がなにかの見極めが非常に難しかったようでした。

父のわがまま

一日十時間以上机に向かい原稿書きに励んでいました。父は三度の食事なども書きものの切りの良い時でないとテーブルに

来ないので、母は温かい食事を出すタイミングには大変苦勞していました。

父は書齋に入るとラジオ・テレビには全く興味を示しませんでした。普段でもニュース以外あまり関心がありませんでした。

しかし父は相撲とプロレスが大好きで、その時間は全ての仕事を止めてテレビを見入っていました。来客もこの時間はなるべく断っていたようですが、たまたまその時間に来客などがあると機嫌が悪く気の利かない人だな、と文句を言っていたことも時々ありました。

博士論文とドイツ語

敬吾と寛之は昭和三十六年にそれぞれの分野で博士論文を提出しました。父の字は独特で癖があり大変読みにくく、しかも縦書きの原稿用紙を横書にして続け字で書くので論文の清書には大変苦勞させられました。

昭和三十八年に寛之・敬吾が同時に博士号を取りました。寛之は小浜に、敬吾は東京に住んでいましたが、小浜町では町始まって以来の快挙であると地域の方々が提灯行列を行ってくれたそうです。現在小浜町富津に雲仙市教育委員会が「関三兄弟」の業績を記した案内板と生家の跡地を示したポールを建ててくれました。関家は五人兄弟なのになぜ三兄弟なのか不思議に感じます。

父はドイツ語を学びましたが、何故ドイツ語を選択したかを聞いたところ、水産学校では英語の必要性がほとんど無かったのであまり英語の勉強をしなかった。大学で英語を選択した場合授業についていくのは大変であると考え、医者であった兄たちの影響もありドイツ語を第一外国語として選択したように聞きました。本格的にドイツ語を勉強するため東洋大学に学びながら東京外国語大学の夜間部に通い勉強をしました。

ドイツ語を学んだことが学問の研究や将来に大いに役立ちました。グリム兄弟の研究にも発展し、東京学芸大学定年後はドイツのゲッチンゲン大学から客員教授として招聘され、一年半ほど教鞭をとりました。

帰国後の病院生活

単身ドイツでの生活の苦労で、帰国後体調を崩し東大の付属病院に一年ほど入院しましたが、入院生活は呆れるほど我儘で医者泣かせの連続でした。父は家族に原稿書きに必要な書籍を病院に運ばせ、ベッドの上で原稿書きを行いました。消灯後は他の患者の方々に迷惑になるので、待合室で原稿書きをしたことも度々ありました。最初は目立たない様に静かにやっています。医者も看護婦もはじめは強く注意しましたが、お構いなくマイペースで原稿書きをしている父に、医者も最後は「命の保証はしませんよ」と匙を投げたようでした。

自分の一番大事な時に病気をしたことを悔やみ、自分と時間の戦いだったように感じます。またある時は医者のカルテを覗き込み「スベルが間違っているよ」などと悪たれをついたこともあったようです。

入院時病院のベットの上で書いた論文で「柳田賞」をもらったように思います。

医者泣かせの患者で、わがままで自分勝手な行動でしたが、九十歳まで生きた父は満足な一生だったのではないのでしょうか。

晩年の学問に対する思い

父に対する他人の評価は色々ありますが、口承文学という学問を大変愛していました。

五十年以上前のことですが、師である柳田国男と昔話(型)の分類方法で意見の相違もありました。父の著書「日本昔話集 成全六巻」を柳田から共著にしないかとの提案がありましたが、断ったことなど多くの対立もありました。自分の考えを曲げなかったことなど父らしい考えで誇りに思います。

日本口承文芸学会会長初代会長引退後に名誉会長への推薦がありました。「名誉会長」の名称を残した場合、後々その名称の取り扱いに皆様方が苦勞されることを考えたのか「名誉会長」の肩書は不要であると辞退したように聞きました。父らしく大変よかったと思います。

七十代は病気のこともありましたが時間との戦いのようによく頑張って仕事をしたように思います。八十代になると勢いは落ちましたが、それでも毎日八時間以上机に向かい仕事に精を出していました。時々気分転換と本を探しに紀伊国屋書店や丸善に行くことが最大の楽しみであり息抜きだったように思います。ある時紀伊国屋の帰りに転倒骨折し入院したことが寿命を縮めたのではないかと悔やまれます。

父は学問的にまだまだやりたいことが多く残って心残りだったと思いますが、私にとっては頑固で妥協を知らない人であつ頑張り屋の素晴らしい父でした。

父の書籍および資料約三万二千点が遠野市図書館に「関敬吾文庫」として保管され多くの研究者に利用されています。又昔話の分類に使用した数万枚のカードは國學院大学で整理中ですが、研究の一助になれば幸いです。

令和元年（二〇一九）七月十五日が生誕一二〇年、令和二年一月二十六日が没後三十年です。この記念すべき年に父の思い出を書かせて頂いたこと感謝します。

「日本口承文芸学会」が更に発展することを祈ります。

（せき・しのぶ／関敬吾・二男）

【第七五回研究例会 関敬吾の口承文芸観】

母と息子との「民話」

高木 史人

一、思い出のセキセンセイ

初めて関敬吾という人を見たのは、一九七七年十月、大学一年生の秋だった。場所は、目白の日本女子大学であり、若々しい小澤俊夫ゼミの小さな教室だった。おそらくその中には中村とも子らも学生としていたのだろう。喜寿を迎えた関は、当時『日本の昔話―比較研究序説』（一九七七 日本放送出版協会）を上梓した後で、矍鑠としていた。國學院大学説話研究会（以下、研究会）の一員として飛び入りで小澤ゼミの授業に加わった。当時、研究会は学生運動がおちついて間もなく、学生の自治が強く通されていた。大学一年では、益田勝実『説話文学と絵巻』、西尾光一『中世説話文学論』、稲田浩二『昔話は生きていく』の三冊を読むことが課せられていた。その他の柳田國男、折口信夫、関敬吾、白田甚五郎、野村純一らの著書は自分たちで勝手に読んでおけということだ。フィールドワークに行くこ